

『その時、歴史が動いた』後記

松下重男

さる七月、放映されたNHKテレビの『その時、歴史が動いた』のインタビューの際、一段落したとき、プロデューサーの質問がありました。

『金子翁が整理後、意気消沈の状態がどんなであったか』と、その話が聞きたいと、私はその時は、えっと言葉に窮した次第でしたが帰宅後、よく考えましたら次のような結論に達しました。

私が金子翁にお伝えしましたのは、昭和十三年頃から応召した昭和十七年暮迄の間であり、昭和二年の整理から既に十年以上の経過もあり、全然整理後の悲壮感なく、会社は順調に動いて居り、私達の立場としては一流の勤務が出来得たものと思っています。

当時お家様（よね刀自）、大主人様（岩治郎）、金子翁は法的役員としての名はなく無官でありました。しかし、翁は一年三百六十五日、休みなく出社された次第で公私なく公が私であったようです。

初代岩治郎社長死去の際、親族会議で廃業云々の意見のあるなか、お家様は番頭である金子翁を信頼し全責任、権限を与え存続を決意されたそうです。

それに応え翁は『士は己を知るものの為に死す』の気概で奮闘努力

の結果、鈴木商店の大飛躍がありました。

その後昭和二年の運命の日に際しても、お家様は泰然自若として『エレベーターが下るような気持だが、また上るだろ』と、再び翁を信頼して再建を託された次第で、その恩義に報いる為、滅私奉公された次第であると思っています。

昭和十七年頃は、太陽産業は日商、神鋼の大株主でもあり、神鋼の田宮嘉右衛門社長には翁として一番無理を言える仲であったようで、親密な会話が度々ありました。

戦時下、神鋼も拡張の時代、太陽の子会社が脇ノ浜工場の土地埋立事業を担当、相当の利潤を頂いた次第です。

昭和二年に手離した一ノ谷の社宅（翁入居）を右子会社が買戻し、内装も済み翁に入居をお願いした訳ですが、辞退され従来の御影の社宅で昭和十九年に死去された次第です。

戦後、昭和二十一年頃、其の一ノ谷で私達は、社宅の芝生を掘り、さつまいもを作り、給与の足しにしたり、そこに入居している社員と海水浴に行き、ばか貝をとり、ドロクで乾杯し、戦後の苦しい時代を過ごした思い出の社宅は即ち金子翁の夢のあとでした。

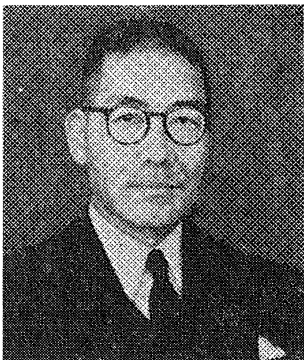
鈴木商店、金子翁も亡くなりましたが、当時の事業も人も残り現在まで、それぞれ脈々として存続されて居り、昭和三十五年、当時の『同じ釜の飯をくった』人々が数百名相寄り、全国辰巳会が発足されました。

私の新語として『万骨功成り、一将枯る』は如何でしょう。

天職に生きる

落合豊一

元日商(現・日商岩井)株式会社社長



卒業（神戸高商）が間近くなるにつれ、あちらからも、こちらからも就職の口がかかってきた。現在の就職難時代から考えると、まるでウソのようだが、その当時は

第一次大戦ばつ発まもないころで、非常な好景気、ムコ一人に会社が八つとまでいわれた時代である。卒業者の全員に対して各会社から猛烈な引抜き合戦が行われた。私に対しても同時に神戸の鈴木商店と、三井物産から誘いがあった。私は神戸高商時代の恩師津村秀松教授のすすめにしたがって、鈴木商店に入社することとした。

大正六年の春である。私は当時満二十二歳、いよいよ実社会に一步踏み入れたのである。

鈴木商店に入社すると同時に、まず外国通信課に勤務した。こゝでは世界各国に散在している出張所や、支社との間の通信などについて連絡を続けていくのである。三ヶ月のち、こんどは受渡部に回された。こゝでは主として倉庫係をやらされたが、これがなかなかどうして、なれるまでが大変なのである。毎日人力車に乗っては倉庫回りを

するのである。そして、入庫の数と、帳簿上の数が間違っていないか、一々チェックしていくのだ。当時電気銅の輸出が非常に盛んで、倉庫の中にはいつもギッシリ電気銅が山積みされていた。

電気銅の計量をするときに、その桿をきめる方法が非常にむずかしい。初心者の私にとってはつぎからつぎへと目にもとまらぬ早業でテキパキ処理されていくのを見ると、果たしてこれで正しいのか、どうかトッサには判断しにくい。『ちょっと、いまのところ変だからもう一度やり直してくれ』なんていうもんなら、浜の荒くれ沖仕たち、眼をむいて『一々、そんな悠長なこというとつたら、仕事もなにもできない』とものごいけんまくだ。結局、この倉庫係を三ヶ月ばかりやったが、どうしても熟練の域まで達しなかった。

そうこうするうちに、突然八月半ばのひる下り、支配入室からの呼び出しがあった。『一体何事だろう。なにかお叱りでもうけるのか』半信半疑で支配入室に入った私に下されたのは、なんと『海外派遣』の命令なのだ。そのときの喜び、いまに至るも到底忘れることの出来ない感激の一瞬だった。しばしばう然としている私に、支配人はこういった。『こんど、君を入れて六人ばかり海外派遣させることにしたが、君の成績が一番いいので、ロンドンでも好きなところをいい給え』瞬間、私は『一体どこにしたものだろうか』としゅんじゅんした。しかし私の脳裏にひらめいたものは華やかなニューヨークでも、ロンドンでもなかった。そこにはおびただしい小麦の山積された小麦の一大メッカ、北米シヤトルの姿が浮かび出てきたのである。神戸高商を卒業するときからの念願『小麦問題』と力の限り取組みたいとの熱情がうつつとしてわき出てきたのだ。

『世界一の小麦生産地であるシヤトルにやって頂きたい』と私はいつ